

第5回 ふくまる夢たまごセミナー

日時 8月22日(水) 18:00~20:00

場所 池田市中央公民館 3階大ホール

内容 講話「安全・安心な学校づくり」

～17年前のあの日 後世に伝えていかなければならないこと～

講師：矢野克巳 氏（前池田市立緑丘小学校校長）

第5回ふくまる夢たまごセミナーは中央公民館で開催されました。日程と会場の変更もあり、参加者が少し減りましたが、それでも22名の塾生のみなさんが定刻どおり元気な顔を見せてくれました。

今回のテーマは「安全教育」です。

今年も矢野克巳先生（前緑丘小学校校長・元大阪教育大学附属池田小学校副校長）にお越しいただき、大阪教育大学附属池田小学校での悲惨な事件の当事者として、体験談をもとに安全教育についてお話をしていただきました。



大阪教育大学附属池田小学校で起こった児童殺傷事件も、今年で17年目を迎えました。当時、副校長としてお勤めになられていた矢野先生から、この「ふくまる夢たまごセミナー」で、当時の様子や事件後の思いを、お話していただくようになって、7年目になります。先生は、2度とこのような理不尽な事件を学校内で起こしてはならない、体験した者の責任として、これから教師をめざす若者に伝えなければならないという思いから、辛い記憶を乗り越え、お話

していただくようになったとうかがっております。

そんな矢野先生も、今年の3月末、緑丘小学校長を最後に定年退職をされ、長きにわたる教職生活にピリオドを打たれました。先生にとっては、様々な思いを胸に、感無量の思いでその日を迎えたことと推察いたします。そのような中、今年もセミナーでのお話をお

引き受けいただきましたことを、改めて感謝したいと思います。

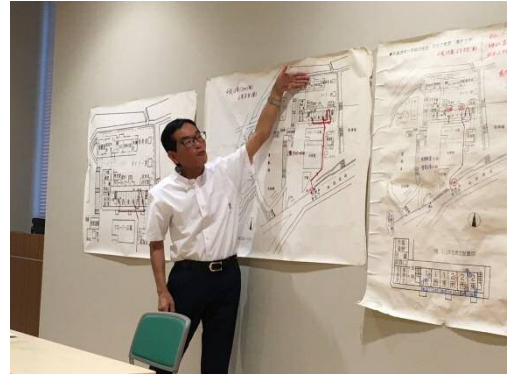
矢野先生のお話は、意外にも附属池田小学校での充実した11年間の思い出



に始まりました。充実した研究活動や同僚や子どもたちとの楽しい学校生活、そして保護者のみなさんの教育活動への積極的な協力への感謝等々……。

そして、突然の忌まわしい数分間の出来事に話は及んでいきました。

今年も、犠牲になった子どもたちやそのご遺族、今なお後遺症に苦しむ被害者やそのご家族のことを気遣い、時折、自責の念にかられるかのように、一言一言をかみ締めながらお話をさせていただきました。



今、池田市の学校で展開されている子どもを守る施策（スクールガードリーダーの配置、門扉のオートロック化や地域住民等による安全見守り 等々）は、この附属池田小事件の教訓にあったことを忘れてはなりません。17年前に起こったこの2度とあってはならない悲惨な事件を風化させてはならないという思いでいっぱいになりました。

以下、矢野先生のお話の要旨を掲載します。

附属池田小事件を教訓として 後世に伝えていかなければならないこと

事件当時の教職員は、目の前に起こっていることに、各々がその場の判断でそれぞれが必死に子どもたちの命を救おうと懸命に救命活動を行ったが、結果は多くの痛ましい被害者を出してしまった。混乱の中で学校全体としての状況把握ができず、組織だった救命活動を行うことができなかった。

<安全管理に万全はない>

- ① 普段からの安全管理が大切（「まさか」からの脱却）
 - ・まさか侵入者はいないだろう。 ・まさかプール事故は起きないだろう。
 - ・まさか遊具は壊れないだろう ・まさか……
- ② 「学校は安全な場所である」という神話や過信から、危機意識をもてなかった。「開かれた学校」とは「多くの人が集う学校」と考え、その中に犯罪者がいることは想定できなかった。（むしろ、外来者を歓迎していた。）
- ③ 京都日野小事件の教訓が安全管理に生かせなかった。
 - ・自分たちの学校でも起こりうることだと想像力が働かなかった。
- ④ 管理職に危機管理意識が不足し（遊具や体育科指導等に行けるケガ防止対応には関心を向けていたが）、教職員にもいざという時の心の準備が備わっていなかった。
- ⑤ 児童通用門、正門小扉、自動車通用門が常時開放されたままになっていた。安全よりも利便性を大切にしていた。

- ⑥ 校舎前の樹木が、来校者を見えにくくしていた。(安全設備・環境への意識が低かった)
来校者を職員室等から見渡せる工夫を設備点検でも入れる必要がある。
- ⑦ 来校者確認は、事務所前で行っていたが、悪意を持つ侵入者に対しては無防備であった。
- ⑧ 教職員の来校者に対する安全管理意識が低かった。来校者への「声かけ」の大切さ、教職員同士に共通確認できていなかった。
- ⑨ 事件後、学校の電話(3台)がパンク状態。児童緊急連絡網(家庭電話)が機能せず。非常時の連絡体制が未整備であった。
- ⑩ 緊急時の児童の帰宅方法を検討していなかった。

<不審者対応緊急マニュアルがなかった。>

- ① 不審者対応や多数の負傷者を想定した緊急マニュアルがなかった。→訓練もせず。
- ② 目の前の対応に必死で、組織だった救命等を行うことができなかつた。負傷児童の氏名、場所、人数、負傷の程度等の確認ができず、混乱の中で各教員まかせの救命活動になってしまった。【管理職のリーダーシップが発揮できなかつた】
- ③ 火災報知機を火事以外で使用するという意識がなかった。火災報知機は全校に学校危機を知らせる有効な方法であることに後で気づいた。
- ④ 救急搬送に教職員が同乗することができず、どこの病院に搬送されたのか掌握できなかつた。→傷ついた児童に保護者が早期の面会ができなかつた。
 - ・救急搬送担当者(複数)を決めておくことが必要
- ⑤ 情報交換が十分でなかつたため、全体的組織的な救急活動ができなかつた。指令本部が必要。私自身が大学への連絡、保護者対応、警察対応、マスコミ対応等で動き回っていた。また、事件後、直ぐに事情聴取のため警察に連れて行かれてしまい、事件後の緊急対応を行うことができなかつた。事情聴取は後日にしていただくようお願いをすればよかつた。(警察に反論する余裕すらなかつた。)
- ⑥ 事件後、即座に「緊急対策室」を立ち上げ、組織だった対応を行うべきであった。
- ⑦ 結果として、「110」より、人命救助は「119」を
 - ・犯罪が起こってけが人等がでたとき、「110」は事情を聞かれるので時間がかかる。
 - ・消防は、生命がかかっているためできるだけ早く駆けつけてくれる。

<教職員は、子ども一人ひとりの大切な「いのち」を守る仲間>

事件後17年が経過し、本事件はだんだんと風化してきている。保護者や地域の皆さん教職員の危機意識はしだいに薄れ、「いじめ」「不登校」「自殺」「ハラスメント」「虐待」等の問題にその関心は移ってきている。当然、これらの問題は学校危機管理の上からも非常に重要な問題であるが、「子どもが安心して学ぶ学校」を創っていく上で、本事件の教訓も決して忘れてはならない。

<危機管理意識の低い学校の特徴>

- ・上靴にサンダル履きの教職員が多い学校
- ・名札を着けていない教職員が多い学校
- ・毎年、侵入者対応プログラムにもとづいて、訓練や確認を行っていない学校

- ・附属池田小事件を他人事だと思っている教職員が多い学校
- ・保護者や地域の皆さんから危機意識が弱まってきている学校
- ・学校事故やプール事故を想定し、マニュアル化や訓練を行っていない学校
- ・学校事故の未然対策を怠っている学校 等々

塾生の中には、この事件についてほとんど知らないという者もあり、いつも以上に、切実感を持って聞き入っていました。

講演後は、矢野先生のお話を受け、「学校の安全」について班別協議を行い、班ごとにどんなことが話し合われたかを交流しました。

その報告を受け、セミナーアドバイザーから、「安全教育は、子どもの回りから危険を取り除くだけのことではなく、危機回避能力(危険をかいくぐる力)を身につけること」、「『万が一』は起こり得るということを前提に『万が9,999』の日常を大事にしてほしい」、さらに「『正常性バイアス』『オオカミ少年効果』をいかに脱却するか」等々の話がありました。最後に、学校現場ですぐにでも実践してほしいこととして、どんな理由があっても「非常ベルがなったら、まず避難！」を徹底してはどうかという提起があり、第5回ふくまる夢たまごセミナーが終了しました。

改めて、ふくまる夢たまごセミナーでこの講座を設けることの意義を強く感じました。



<塾生の感想から>

- 附属池田小事件について、初めて当事者の方からお話を聞かせていただいて、現在もこの事件で苦しんでいる人たちが多くいるのだと、改めて感じました。当事者でなければ分からないこともたくさんあるけれど、そういったことを知ろうとすること、苦しみや悲しみを分かろうとすることが大切だと思いました。お話の中で、「危機管理」をよく耳にしましたが、危険な要素に気づく視点とその引き出しを持たなければならないと思いました。

これから教育実習に行くので、授業のことだけでなく、どのような危機管理がなされているのか、どのように安全教育がなされているのかをしっかりと見聞きしてきたいと思いました。
- 私は池田市出身で、この事件の時は年長でした。周囲には、事件の次の年に附属小を受験した人や、親が消防隊員で、事件の日に駆けつけたという友だちの話を聞いたことがあります。こうした話を聞いて育ってきて、さらにはスクールガードリーダーや防犯カメラがある中で学校に通っていたにもかかわらず、自分の身に置き換えて考えたことはありませんでした。避難訓練をしても、ただしているだけの流れ作業になっていたなと思います。もし担任になったとき、非常事態になったら、正直、冷静に対応できている自分の姿が想像つきません。しかし、教員は子どもを守ることも仕事です。日ごろから「万が一」を想定して、子どもたちを見守っていききたいと思いました。
- 当時の副校長先生のお話はとても重みのあるお話でした。本当ならば話すことすらも辛いほどの大きな心の傷があるのに、それを私たちに話して下さったからには、この事件を風化させてはいけないと思いました。将来の私たちは、この事件の反省を生かせる立場にあると思います。自分は大丈夫だろうと思いがちですが、人生は何が起こるか分からないので、常に頭の片隅に置いておこうと思います。
- 附属池田小事件について、ふくまる教志塾に入塾して初めて耳にしたので、気になって、自分でインターネットで調べました。宅間の発言、行動が本当に許せず、胸が引き裂かれるような気持ちになりました。学校では、子どもたちの大事な命を預かります。「まさか……」と考えるのではなく、また、「忙しい」で後回しにするのではなく、日頃から子どもの命を守るための安

全教育を徹底していく必要があると感じました。

子どもたちにとって、訓練が「めんどくさい」ものとならず、自分ごととして動けるようにするためにも、事件を語り継ぎ、風化させないようにしたいです。